

Title	ピーター・ゲイ著『啓蒙主義・ひとつの解釈』：近代的異教の抬頭
Sub Title	P. Gay, The enlightenment : an interpretation : the rise of modern paganism
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.10 (1968. 10) ,p.126- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19681015-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Peter Gay,

The Enlightenment: An Interpretation

—The Rise of Modern Paganism

New York, Alfred A. Knopf, 1966, xviii+555

+ xv pp.

ピーター・ゲイ著

『啓蒙主義・ひとつの解釈』

——近代的異教の抬頭——

「一層深いところで、フィロゾーフは情熱的な合理主義とでも呼ばたいような一般的世界観を眺めていた。彼らの合理主義とは……理性への抽象的な信仰ではなく、理性の全能性に対する素朴な信頼でもなかつた。むしろそれは一切の立場を仮設として——彼ら自身の立場をも含めて——取り扱う批判精神への信仰であつた。フィロゾーフは神話の仇敵であつたし、彼らが進まずからその犠牲となつた神話はすべての人間が分ち合う限界にはかならなかつた。彼らの合理主義は……プラグマティックなものであつた。つまりそれはあらゆる問題の議論を、あらゆる命題の検討を、あらゆる聖域への侵

入を要求したのだ。……フィロゾーフは同時に情念を研究し、蘇生させ、性的衝動を文明生活に統合しようと試み、そして人間の最高の思考を深奥な感情と調和しようと目論む哲学のために基礎を据えたのであつた。……啓蒙主義は情動と合理性との、欲求と自制との安易な、皮相な調整を擁護したわけではない。それらの緊張は彼らの思想に浸透しているし、しばしば見逃されがちな悲劇的諦観という感じをもあたえている。……フィロゾーフは悲劇的ヒューマニズムを告白したのだ。ヒューマニズムという言葉は豊富な含みをもつている。だが、フィロゾーフはこの言葉のあらゆる意味においてヒューマニストたることを要求し得た。彼らは古典の教養を信じていたし、ヒューマニズム的な主張に活発であつたし、広義の哲学的な意味で、彼らの道徳的世界の中心に人間を置いていた。……彼らの改革的な諸著述は行動主義と現実受容との混合である。すなわち、人間はみずからの園を耕さねばならない。しかしこの言葉を充分に探究すること、そしてそうするには——啓蒙主義の本質を決定し、その現代に対する意味合いを思索すること——もう一冊の書が必要であるう」。

これはピーター・ゲイの *The Party of Humanism: Studies in the French Enlightenment* (London, Weidenfeld and Nicolson, 1964) の結語である。研究ノート風に書きとめられたこの書には、著者のみずみずしい、思想に喰い入るような情熱があふれている。そして、もう一冊の書は、今やわれわれの手にする『啓蒙主義』という部厚い書として完結をみたのである。否、完結ではない。本書にはやが

てその第二冊の公刊が予定されているからだ。そうなれば恐らく、ピーター・ゲイの啓蒙主義研究は従来の如何なるものよりも浩瀚な、屈指の労作となるであろうことは疑いない。このことを念頭に置きつつ、本書を紹介しておきたい。

ゲイが敢えてひとつの解釈を試みる理由は、他のさまざまな解釈があるし、またあり得るといふことを前提としているからである。例えば、最近のもつともボレミックなものとしては、Carl Becker, *The Heavenly City of Eighteenth Century Philosophers*; J. L. Talmon, *The Origins of Totalitarian Democracy*; L. G. Crocker, *An Age of Crisis: Man and World in Eighteenth Century Thought* などがあげられようが、啓蒙主義に対する讚美にせよ断罪にせよ、著者はこれらを一概に否定しているわけではない。しかし「右派の悪意」——J・L・タールモンの如き——には批判的であり、「ボレミックからシンターゼへと移行する」必要性を強く抱いている。E・カッシーラーの『啓蒙主義の哲学』(Ernst Cassirer, *The Philosophy of Enlightenment*, tr. by F. C. A. Koelln and J. P. Pettigrove) を彼は最良のものとし、カッシーラーに多く負うていと述べている。もつとも、カッシーラーは余りにカントの批判哲学によつて「合理性」を解釈し、かつフランス唯物論者やヒュームの懐疑主義を過少評価する徳みがあることを認めているが。

やうに、彼のひとつの解釈とはひとつの啓蒙主義 *the Enlightenment* すなわち啓蒙思想の全体像を構築しようとするものである。むしろそれは *unity* や *unity of unanimity* ではない。「啓蒙主義の

人びとは広大な野望なプログラム、世俗主義、人間性、世界市民主義、自由、とりわけ多くの形態における自由——恣意的権力からの自由、言論の自由、商業の自由、自己の能力を実現する自由、芸術的感応の自由、ひと言でいえば、世界において己が道を進みゆく道徳的人間の自由というプログラムについて統一していたのである」。カントが問うた「啓蒙とは何か」という問題の答えは *Supere aude* であつた。未成年から人間自身となること、種々の相反する思想が咲き乱れていたにもかかわらず、フィロゾーフは人間が成年に達したことを自己確認したのであつた。人間が人間たること、それが思想の近代性である。ヨーロッパ精神史における啓蒙主義の決定的な意味はまさにこれである。「フィロゾーフの体験は……自律性への弁証法的闘争、彼らの継承した二つの過去——キリスト教と異教——を同化して、それらを互いに戦わせ、かくして彼らの独立性を確保しようとする企図であつた」。すなわち、フィロゾーフは「近代的異教徒」なのであつた。

キリスト教との緊張、古代への憧憬、そして近代の追求、これらの弁証法的な絡まりのなかにフィロゾーフの表情は浮んでくる。これらの点で、彼らのペルソナは同じである。ゲイはそれゆえに「フィロゾーフ」という言葉で啓蒙主義のすべての人びとを呼ぶ。フランスにおいてももつとも劇的な、好戦的な表現を得たけれども、それはフランス人のみでなく、同時代人に相応しいひとつの言葉であり、煩瑣な斜体で書く必要はない。フィロゾーフの闘争は何時はじまり、何時終つたか、著者は通常の区分にしたがつていない。すなわ

ち、十八世紀の革命期(モンテスキューは一六八九年に生れ、ドルバットは一七八九年に死んでゐる)、啓蒙の世紀とはこの一〇〇年であり、この間、神への詭悽の輩と争ひ、敢然として生きた世代である。それは「蒙昧、キリスト教、無知」(ヒューム)を軽蔑した世代である。「恥知らずを粉砕せよ」(ヴォルテール)と叫んだ世代、崇高なアンティ・クリストの世代なのだ。

智慧を愛する哲学者——アウグスティヌスによれば、「眞の哲学者とは神を愛する者である」(Vernus philosophus est amor Dei)。それ故に中世においては、*philosophia ancilla theologiae* であつた。「野蛮な無知からスロラの無知へ」(de ignorance sauvage à l'ignorance scolastique) 移つた暗闇の時代を抹殺すること、フィロゾーフの哲学的課題はまさにこれである。本書の第一部「古代への訴え」は、まず彼らの思想的源泉をたどる。彼らが把握していた古典古代はむろんわれわれのものではない。だが例えば、フィロゾーフのトロイは考古学的遺跡ではなく、生き生きとした愛着、*Lebensgefühl* にはかならなかつた。眞理は前キリスト教の時代に存在する。ギリシア・ローマの古典への愛情、かかる眞理への無限の追求——眞理とは所有するものでなく、絶えざる探究であり批判である(レッシング)——がフィロゾーフの基本的態度である。とくに彼らが称揚したのはキケロであり、ルクレティウスであつた。キケロの *humanitas*、*「人間は人間に対して神聖なものである」* (*homo res sacra homini*) という言葉は、フィロゾーフによつて繰り返されたのであつた。

ルネサンスが啓蒙主義の前史を形成していることは言うまでもない。一三〇〇年から一七〇〇年までの四世紀は「異教的キリスト教の時代」とも呼ぶべきであろう。ルネサンスの象徴は教会であつた。彫刻、建築、絵画の中心テーマは依然としてキリスト教的であつた。だが、そこには中世的信仰の翳がさしていたことは紛れもない。他方ルネサンスの人びとは、理性と人間性の勝利を確信していたわけではなく、むしろ絶望的でさえあつた。古代とキリスト教をどう和解させるか、ヒューマニストの苦心はこのところにあつた。この意味ではイエズス修道会士も近代主義者と言えるし、文字通り *treason of the clerics* であつたのだ。いずれにせよ、フィロゾーフは、ルネサンスをヨーロッパ精神の覚醒という偉大なドラマの開幕、そして啓蒙主義自体をその終幕とみなしていた。十五世紀以来の思想風土がすでに世俗化し、宗教問題が生活の中心でなくなつていたからこそ、モンテスキューの『ペルシア人の手紙』やヴォルテールの『哲学書簡』が一般に受容されたのである。ドイツではプロテスタントイイズムが依然として影響力をもち、敬虔主義が色濃く残つていた。しかしながら、ヒューマニズムの宗教、レッシングの「賢者ナータン」が啓蒙主義者を代表しており、理神論者であれ唯物論者であれ、フィロゾーフは「世俗的信徒」であつた。

このような *tour d'esprit* を物語る話を引いておこう。一一九四年六月のこと、Chartres の街に大火が起つた。そのためその大寺院は焼失してしまつたが、その神聖な遺品、処女マリアがキリストを生んだとき身に纏つていた下着も失なわれた。人びとは神

の怒りを恐れた。大寺院再建の目当てがなくなつてしまつた。ところが、当地にいたピサの枢機卿メリオールは氣転をきかせた。彼はこの聖なる事業のために、僧団集会を招集した。監督や司祭たちが行列をなして街にあらわれた。かの神聖な下着をおし戴いて。失なわれなかつたのだ。まさに奇蹟的な回復である。人びとは涙を流した。マリア様は新しい美しい教会が欲しかつたから、あの火災で焼いたのだ、新しい聖堂を立派に再建しようとな誓つた。僧俗一体であつたとしても美しい宗教の時代のことである。十八世紀半ばにはどうであらうか？ 一七五〇年二月八日と三月八日とに、ロンドンで軽い地震があつた。誰れも死ななかつたが、この日付けから不吉な連想が生じた。発狂した一兵士は四月八日に第三の大地震が起るとふれ廻つた。多くの市民が疎開した。とウォルポールは当時の事情を伝えている。だが勇氣ある婦人たちのなかには、屋外で夜に着るための《地震寝巻き》なるものをつくつたという。ヒュームはある友人に嘲笑的に告げているが、断食、祈禱、懺悔、禁欲、そのほか薬料の如き地震丸薬を推薦する教書を監督が出版し、この教書は凄しい売れ行きだつた。このためにヒュームの『人間悟性に関する哲学的論集』の出版に支障をきたしたということだ。

このヒュームとともに、フィロゾフは「聖域を超えて」近代の關に立つ。自然宗教、「宗教の自然史」を書いた彼は完全なる近代的異教徒であつた。「すべてのものが謎であり、不可解であり、説明不可能な神秘である。懷疑、不確実、判断中止が、この主題に関し、われわれのもつとも正確な精査の帰結であるらしい。だが、かか

ることこそ人間理性の脆弱さであり、かかることこそ臆見の不可抗な瀾漫なのであつて、こうした慎重な懷疑でなえも殆んど支持され得ないのだから。われわれはみずからの見解を拡大したのではなく、ひとつの迷信を他の種の迷信に対立させながら、それらを争わせたのだ。しかるにわれわれ自身は、彼らの狂躁と論争のさなかで、幸いにも哲学の静謐な——曖昧ではあるけれども——領域へと逃走しているわけである」。彼は死の影にさえ怯えない。彼は不確定に、たんに蓋然的妥当性を指針として生きようとした。

“Where am I, or what? From what causes do I derive my existence, and to what condition shall I return? Whose favour shall I court, and whose anger must I dread? What beings surround me? and on whom have I any influence, or who have any influence on me?”

ヒュームのこれらの問いかけこそ、キリスト教信仰を踏みしめたフィロゾフの懷疑的・批判的精神、「敢えて賢明であれ」とみずからに命ずる人間にはじめて可能な自律の精神の発露である。近代を求めて、彼らが如何なるイメージに思いを馳せていたか、それは著者のもうひとつの書によつて明らかにされるであろう。われわれはそれを切に期待している。最後に、本書の末尾に附せられた文献解題は英、独、仏、伊各国語の啓蒙主義研究をほぼ網羅したすぐれたもので、ビーター・ゲイの学識の深さがうかがわれる。

(奈良 和重)